

校内研究会「架橋(かけはし)研」という取り組みについて



学校・園では、日々の授業の充実を目指し、教職員で授業を見合い、協議する取り組み、校内研究会を実施しています。その一環として、幼保小が一緒に取り組めるこの環境を生かし、昨年度から「架橋研」という勉強会を行っています。メンバーは、1年生担任・幼稚園教員・保育園職員を中心に、他に、その時間参加できる小学校教員も含めて実施しています。授業・保育参観と協議会（左写真）をセットで行う会です。

その目的は、まさに、幼と保と小をつなぐこと（かけはし）です。その中でも、特に、幼保と小のつなぎ部分をいろいろ議論しています。そこが議論の的となる一番の理由は、幼・保は「遊び」、小は「学習」という、ネーミングの違いと、そこから起こる活動の違いです。

先日9日（水）には、1年生の生活科の授業をみんなで観察し、その後に協議を行いました。内容は、「夏ともだち大作戦」という大単元の中の「夏まつりをしよう」という小単元で、やりたいもので別れたグループごとに、夏まつりで使う道具などの準備をする45分の授業でした。場所を広くとるために、机やイスは廊下に出し、事前に子どもたちのイメージを引き出し、作成で必要だと思われる道具類を、子どもがそれぞれ自分の力で作ったり試したりできるように用意しておくという環境の中での授業でした。おや？この形は？そう、まさに幼稚園や保育園での活動の時間と同じでした。

でもそこは1年生、作ることそのものを遊びのように楽しむだけでなく、夏まつりの実施に向けて、「夏まつりを成功させよう」という学習の目的を明確にしながら、目的意識を大事にした活動を展開していました。

子どもが夢中になれる場を教師が用意すること、子どもがどんなことに夢中になっていくかをしっかり予測して準備することは、幼保も小も同じだということが、授業観察や協議会を通じて確認できました。「入学期にはこんなカリキュラムにすればよい」というような、機械的・形式的な話ではなく、今回の観察・協議会のように、関係者が一堂に会し、大切なことは何か、どんな架け橋期にしていけばよいだろうかということと一緒に議論することにとっても意味があると、ご指導をいただいた講師の先生からもお話しいただきました。

園から小学校へ、「遊びから学習になる」と親も子も、私たち教師自身も思い込んでいる節があるのですが、子ども自身には段差はありません。緩やかな成長をしているのです。大人が、「小学校に入ったのだから、そこに合わせる」と強要するのではなく、それぞれの段階でどのような指導をしているのかを理解しながら、今日の授業や保育を考えていくこと、それが架橋研なのだろうと思っています。

もちろん、口で言うほど簡単ではなく、試行錯誤の繰り返しですが、そんな取り組みもやっていることを知っていただきたくて書いてみました。